

仏像の北伝ルート東漸に伴う 口唇微笑造形変化の数量解析

Numerical analysis on variations in Buddhist sculptures' lip smile expression along with the Buddhist advance eastward via the north asian route

小林茂樹¹⁾、長田典子²⁾

Shigeki KOBAYASHI¹⁾, Noriko NAGATA²⁾

E-mail : kobayashi@keisolabs.com

和文要旨

仏像の制作は、1世紀末ころに古代インドで発祥した後、アジア各地へ伝播し、各地・各時代で多様な造形を展開した。最初期の仏像作者は、仏陀の慈悲を表すために口唇の造形にしばしばアルカイクスマイル形式を採用した。この造形は口角を上方へ引き上げた表象である。

仏像のアジア北伝ルートを経由する東漸に沿って変化する口唇造形の推移を明らかにするため、私たちはガンダーラ、マトゥラー、中央アジア、中国および日本の仏像の顔について、数量解析を行った。

stomion から左右の cheilion に引いた直線が、stomion を通る水平線とそれぞれなす角度を左右の口裂端角度として計測し、左右角度の平均値を口唇造形のパラメータ (ACA) とした。正の ACA 値は、口角を引き上げて微笑を表出した口唇に対応する。負の ACA 値は、口角を引き下げて精神的な落ち込みを表現した口唇に対応する。

解析の結果、マトゥラー像、ガンダーラストッコ像、中央アジア像、中国の北魏・東魏像、および日本の飛鳥像では、ほとんどすべての標本が正の ACA 値をもち、微笑を表出していることがわかった。いっぽう、ガンダーラ片岩像、中国の隋・唐像、日本の白鳳・天平像、および平安像では、正の ACA 値の比率が低下していた。そして、平安後期から鎌倉期にわたる日本の慶派像の標本では、正の ACA 値の標本の比率はついにゼロになった。しかしながら、江戸時代の円空と木喰の像は、すべての標本が正の ACA 値を示し、高い値を回復した。

仏像の東漸にともなう以上の口唇 ACA 値変化については、上座部仏教から大乘仏教への仏教信仰変遷の影響を議論している。

キーワード : 仏像、東漸、口唇微笑表現、特徴パラメータ、数量解析

Keywords : Buddhist sculptures, advance eastward, lip smile expression, feature parameter, numerical analysis

1. はじめに

仏像の制作は、1世紀末ころから現在のインド・マトゥラー地方とパキスタン・ガンダーラ地方で発祥したとされ [1][2]、その後アジア各地へ伝播し、各地・各時代で多様な造形を展開した。私たちは、この間の顔造形様式変化の数量解析を行っている。

仏像は、単なる信仰対象としてのシンボリック

な物的形象の域に留まらず、悟りを開いた仏陀の精神世界を表象する存在として意欲的に形作られてきた。とくに如来や菩薩などの慈悲形像では、躯幹や手足の大きな動きを抑制し、もっぱら顔貌の表情造形によって精神世界を表象する。そのため、眼や眉や頬や口の造形によって、内面の心性を表現するための努力がなされてきた。

口唇の造形については、ポジティブな内面表現

¹⁾ 形相研究所、Keiso Research Laboratories,

²⁾ 関西学院大学理工学部、School of Science and Technology, Kwansai Gakuin University